

佐藤：農村から寮へ

## 農村から寮へ

—潘毅『メイドインチャイナ——グローバル生産における女性工場労働者』—

佐藤 大修

Pun Ngai

*Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace*

(Durham and London: Duke University Press and Hong Kong: Hong Kong University Press, 2005)

Taishu SATO

### 1. はじめに

本稿は、まず *Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace* のブックレビューを行う。そのうえで、日本の産業労働研究においては、寮・寄宿舎がその重要性にもかかわらず周縁化されてきたことを指摘し、そこに見出される主な要因として、寮・寄宿舎の多面性を捉える際の分析上の困難を挙げる。こうした問題意識を踏まえ、本稿では、本書を中心とする中国南部の産業労働研究が依拠してきた概念を参照しながら、産業における寮・寄宿舎の多面性と産業との関係をより精緻に捉えるための分析視角を探究していく。

本書は現在嶺南大学の **Chair Professor** (教授長) であり、香港大学社会学部名誉教授の Pun Ngai (潘毅) によって 2005 年に出版された研究書である。本書はグローバル生産体制と国家政策が結びつきながら行われる労働主体の構成を問題としながら、女性労働者の生産と生活の現場に着目し、その構造や制度的側面に加え日常的な抵抗、個人のアイデンティティに着目している。現代中国社会と労働主体のかかわりについての社会的洞察が高く評価され 2006 年に本書は社会問題学会 (SSSP) <sup>(1)</sup> から C・ライト・ミルズ賞を贈られている。このように本書は中国社会研究や産業労働研究では高い評価を獲得し、中国の労働を理解するうえでは欠かせない重要な研究となっている。本書はデューク大学出版局から英語で出版された後に中国語の翻訳が出版されたが、現在のところ日本語での翻訳は存在しない。また書評などを通じた日本での紹介も管見の限り未だ行われていない。

Pun Ngai は 1998 年にロンドン大学 SOAS で博士号を取得している。研究テーマはグローバル産業における搾取と労働者生活である。本書は筆者の博士論文を発展し、書籍化したものである。本書を出版後に Pun は電子製造業で働く労働者について iPhone 製造などを請け負う Foxconn を対象に共同で研究を行っている。

本書はもはや中国や現代のグローバル産業を扱ううえでの基礎文献となっており、いくつか

の書評によってある程度の評価は固められている (Thunø 2005; Fischler 2006 など)。そのため本稿ではその内容や貢献を一から整理することはせずに、そうした役割は出版直後に行われた学術的蓄積に譲り、簡単な要約とレビューを行うにとどめる。では 2005 年に出版され学術界での評価も適度に固められてきた本書を取り上げるのはなぜか。それは本書を中国におけるグローバル産業の寮・寄宿舎についての研究として見たとき、日本の産業労働研究に対して重要な示唆があると考えられるからである。

これまで日本の産業労働研究においては、寮・寄宿舎という福利厚生施設の独自性や特殊性が指摘されてきた。日本では大企業の 8~9 割が何らかの形で社宅・寮を提供している一方で、ヨーロッパなど他の先進諸国では、住宅政策において公共住宅の供給や家賃補助などの社会制度が整備され、企業が従業員に直接住宅を与えるという制度は統計的に確認されない (藤田 1997)。歴史的にも、日本産業の発展過程において寮・寄宿舎は労働力の募集・定着を支える不可欠な役割を担ってきた。特に政府の住宅政策や市場が十分に発達していなかった時期には、こうした企業提供の住宅が労働者の居住環境を整える上で極めて重要な存在となっていた。また労働者の生活を包み込む社宅や寮・寄宿舎は、日本的経営論などにおいては労働者の生活を給与以外の形で補助する「フリンジベネフィット」、多様な福利厚生により労働者の企業生活を包摂するウェルフェア・コーポラティズムを構成する一要素として指摘されてきた。このように日本の産業労働において寮・寄宿舎は労働者募集や定着といった生産における基礎条件、またその経営体制を構成する福利厚生として、あるいは労働者の再生産のための物質的基礎の提供が社会福祉や市場から不十分にしかなされない状況下での、労働者の共同住居として大きな役割を果たしてきた。

それにもかかわらず労使関係や労働者の生活、そして産業構造と寮・寄宿舎との関係は未だ不明瞭なままである。それどころか日本の産業労働研究では寮・寄宿舎が正面から扱われることはほとんどなく、その対象としても研究全体の中で周縁化されてきた。本稿はそうした産業労働研究における寮・寄宿舎の周縁化の要因を、生産条件や労務管理装置でありながら労働者の生活空間でもあるという寮・寄宿舎の多面性に求める。産業における寮・寄宿舎が併せ持つ多様な側面はそれぞれ複雑に絡み合いながら生産や労働者に関係している。そのためこうした多様な側面を別個に捉えるのではなく、総合的に把握する分析視角がなければ産業における寮・寄宿舎を正確に理解することは難しい。つまり日本の産業や労働に古くから結びついてきた寮・寄宿舎と生産などとの関係を明らかにするために、その多面性を把握する分析視角が求められるのである。

そこで本稿は、中国におけるグローバル生産の産業構造分析であり、女性移民労働者の労働と生活に対するエスノグラフィー研究である本書が持つ、寮・寄宿舎研究としての側面に着目する。本書を発端とする Pun らによる中国南部の分析は、寮・寄宿舎における多面性を総合的に捉えた **Dormitory Labour Regime** という分析枠組みを提出した。本稿ではそうした **Dormitory Labour Regime** という分析枠組みを整理し、寮・寄宿舎の多面性を捉え生産と関係づけるための分析視角を得ることを目指す。

2 節では本書を簡単に要約する。そして 3 節でこれまで日本で行われてきた寮・寄宿舎を扱

ってきた研究について簡単にレビューを行ったのち、そうした研究の抱える課題を確認する。4節からは Pun らが提出した *Dormitory Labour Regime* を概説し、その後の研究展開と代表的研究を紹介する。5節でこれまでのレビューと概念整理を踏まえて、寮・寄宿舎の多面性把握の上での日本の産業労働研究に対する示唆を述べる。

## 2. 本書の概要

### 2.1. 要約

本書は現代中国においてグローバル資本主義、国家社会主義、家父長制から「三重の抑圧」を受ける労働主体「打工妹 (Dagongmei)」を扱う。「打工妹」とは、主に農村から都市に出稼ぎを行う女性短期労働者である。そうした労働者は主に工業地帯に吸収され、製造業工場での就労を行う。彼女たちは中国の急速な経済発展の中で、階級、ジェンダー、地域間格差に基づいた搾取を受けている。グローバル資本主義の下で新たに生み出されたこの労働主体は、毛沢東時代のプロレタリアートである「工人 (gongren)」とは異なり、資本への従属と労働の疎外が刻み込まれているという。

本書はこの「打工妹」という主体がどのような主体であり（あるいはどのような主体として構成されるのか）、さらにそうした主体がいかに下からの生きる戦略を組み立てていくのかを明らかにしようとしている。こうした新たな労働者階級とその意識は生産関係だけでなく、社会や親族関係、消費や文化、ジェンダーなどの面と深くかかわりあっている。そこで本書はマルクスの階級分析に加え、M. Foucault の自己のテクノロジー、ジェンダーと労働の視点、そして A. Touraine の *Social Actor* 概念を用いて「打工妹」という新たな労働主体を分析する。

本研究は 1995 年から 1996 年までの深圳の *Meteor Factory*（仮名）という電子部品工場でのフィールドワークをもとにしている。筆者は現場労働者と共に働くことを希望して現場に入り、彼女たちと同じ寮で生活した。第 6 章などの内容は寮での労働者に対するインタビューや工場の労働現場についてのエスノグラフィーをもとにしている。

1 章では深圳経済特区内の *Blue River village*（仮名）に焦点を当て、工場労働力を供給する地域の構造や、それを支える制度について分析している。中国の社会主義的戸籍管理システムは、都市への労働者の定住を制限する一方で、労働移動を管理・斡旋する制度と連携し、不安定な農村出身労働者を都市に供給し続ける。この結果、都市は労働者の生活維持を担わず、労働者の再生産は工場が提供する寮や食事に依存する構造が生まれる。こうした移民労働力の大半は若い女性労働者であり、工場は彼女たちを容易に解雇し、また新たな労働者を地方から採用することで、絶え間ない労働力の供給を確保する。このように、市場と結びついた企業と社会主義的国家制度の連携によって、農村出身の余剰労働力供給が可能となり、深圳の発展が支えられていると筆者は論じる。本章では E. P. Thompson の階級分析を引用し、階級が単なる構造的な規定ではなく、文化や生活経験といった集合的かつ関係的な要素により形成されることを強調する。この視点から、農村出身の労働者が都市において経済的・空間的基盤を確保できず、階級的アイデンティティを獲得することが困難であること、さらには支配的言説による

抑圧が彼らの階級形成をさらに阻害していることを明らかにしている。

2章は、従来の家父長制に従属する家庭内の女性という見方に対し、出稼ぎ労働が女性たちに与えた経済的役割、家父長権力への挑戦、そして自己アイデンティティの形成に焦点を当てる。出稼ぎという経験を通じて、農村から都市へ移動する女性たちの個人史が詳細に紹介される。都市へと移動した女性たちは、家族や農村の生活と対峙しながら、新しい生き方を求めている。彼女たちの移住や就職は、親族や同郷者のネットワークを活用しながら、個人的な選択と経済的必要性の双方によって推進されていた。経済的必要性が出稼ぎを促した一方で、それは単なる生計手段にとどまらず、農村の家父長的支配からの離脱や、個人としての欲望・自己実現の機会としての側面もあった。また、工場労働の場では、女性労働者たちが新たな関係性を築き、親族や同郷者によるネットワークを活用しながら生き抜く様子が描かれる。このような移動と労働の経験は、単に女性たちを搾取の対象にするだけでなく、家族との関係やジェンダー役割の再交渉をもたらし、家父長制の維持と変容が交錯する複雑な過程を示している。

第3章は、中国・深圳の工場における女性労働者の身体管理を、権力の微視的物理学の視点から分析し、グローバル資本が労働力を抽出するためにいかに身体を規律化し、管理するかを明らかにしている。本章では、労働者の身体が機械の一部として生産のリズムに組み込まれる様子を詳細に描写し、工場の生産ラインが単なる作業場ではなく、身体を個別化し、分断し、再統合するための権力装置であることを示している。まず、工場の生産ラインは労働者の身体を固定し、各作業プロセスを極度に細分化することで、個々の身体の独自性を排除し、労働力を最大限に引き出す仕組みとなっている。さらに、監視カメラをはじめとする監視システムが、労働者の行動をパノプティコン的な視線の下に置き、厳格な時間割や工場規則が労働者の日常生活全体を規律化する。このような生産体制のもと、資本側は農村出身の女性労働者「打工妹」を「規律化され、従順で、効率的な労働者」として形成することを目的としている。一方で、本章ではこうした管理の強化に対する労働者の抵抗戦術にも焦点を当てる。労働者は単に従順な身体として組み込まれるのではなく、日常的なレベルで巧妙な戦略を用いながら、労働のリズムや管理システムに対抗している。例えば、労働者たちは集団的に生産スピードを調整し、意図的に作業を遅らせることで資本側との交渉力を確保する。また、親族や民族的ネットワークを形成し、サボタージュを通じて労働のプロセスをコントロールしようとする。この章では、女性労働者が生産ラインと規律権力のシステムに組み込まれながらも、単なる支配／被支配の二項対立では説明しきれない複雑な日常的実践を繰り返していることを示している。労働者たちは、資本の管理手法に完全に従属するのではなく、「戦術的な身体 (tactical body)」として、状況に応じた柔軟な対応を行いながら、日々の生活と労働環境の中で自己を守る術を見出しているのである。

第4章では、農村出身の女性労働者が「打工妹」として自己主体化される過程が分析されている。工場管理者による叱責やその際に用いられる比喩は、農村と都市の二項対立と格差を前提とし、都市の価値を高める一方で農村出身女性の地位を貶めるものであった。工場労働に適さないと見なされる「農村的な身体」は、技術訓練のみならず言説や取り扱いによって変容を迫られ、工場内での自己認識の再構築を余儀なくされる。工場内では、地域・親族・民族のグ

グループが形成されており、職務上の地位は個人の能力だけでなく、これらのグループ内での序列にも左右された。工場の管理部門は、このようなグループの特性を利用し、労働者間の競争を煽ることで統制を強化し、生産効率を最大化した。その結果、各グループ間には格差が生まれ、対立や不信感が深まることとなった。待遇面でも、優遇されるグループは賃金や昇進機会のみならず、寮の住環境においても優遇され、個々の労働者は経営者の意向を内面化していった。こうした対立は言語使用の場面にも現れ、職場では方言をめぐる権力闘争が展開された。広東語が管理部門の主要言語として機能し、昇進や職務の安定に影響を与える要素となる一方、非広東語話者は労働環境において不利な立場に置かれた。結果として、労働者は単に賃金労働者となるだけでなく、自己のアイデンティティを職場の力学に適応させる形で変容させられていった。この章では、「打工妹」というアイデンティティが、資本主義的労働関係とジェンダー、地域性、階級的要素が交差する中で形成されることを示し、それが単なる労働力の商品化にとどまらず、労働者自身の主体性のあり方にまで深く影響を与えるプロセスであることを論じている。

5 章では、中国の工場労働における身体の規律化とジェンダー化について分析が行われる。メディアにおける「打工妹」のイメージは、恋愛に積極的で男性の愛を求める若い女性として描かれる。これは従来の従順な女性規範を揺るがすものではあるが、同時に消費欲望に主体を取り込む装置ともなっている。工場では日常的な管理や管理者の発言を通じて、労働者は「女性」であることを繰り返し想起させられ、従順で勤勉な主体となることが求められる。この過程を通じて労働者の身体はジェンダー化され、男性が技術者や管理職に配置される一方で、女性は生産ラインの労働者として組み込まれ、工場内のジェンダーに基づく分業と不平等が再生産・強化されていく。筆者は、この労働する身体のジェンダー化が資本による支配のプロジェクトの一環であると結論付ける。また、女性労働者たちの寮内での会話や衝突、休日の過ごし方にも注目し、それらが労働者を抑圧や搾取からいかに救済するかを分析している。女性たちの夜の雑談やゴシップは、職場における発言の制限を補い、労働環境や管理層に対する批判の場ともなっている。さらに、消費文化の影響も指摘されており、都市の消費生活への憧れが、労働者に「現代的な自己」を演出する手段を提供しながらも、結果的には資本の論理に回収されていく様子が描かれる。この章は、資本主義的労働体制の中でのジェンダーの規律化を明らかにし、工場の管理体制と市場の消費文化が交差する地点で女性労働者の主体形成がいかに捉えられているかを論じている。

第6章では、職場における身体的抑圧や苦痛、困難について論じられる。特に、電子チップの処理に使用される化学溶剤が労働者の健康に及ぼす影響や、長時間の集中的な労働による慢性的な痛みや疲労、ストレスが詳述される。これらの影響は時に不可逆的な疾患をもたらし、月経不順や慢性疼痛、失神発作といった症状が労働者の身体に刻み込まれる。女性労働者は、工業的時間と身体のリズムとの乖離に苦しみ、自己と身体を切り離すことで痛みに対処しようとする戦略をとる。章後半では、睡眠中に悲鳴を上げる症状に苦しむ女性労働者 Yan に焦点が当てられる。彼女の個人史と労働環境における困難が、精神的苦痛や夢といかに結びついているのかが分析される。著者は Foucault が L. Binswanger の仏訳に際して展開した夢分析を参

照しつつ、Yan の夢の中に自由と抵抗の可能性を見出す。彼女の繰り返される悪夢と悲鳴は、単なる個人的なトラウマではなく、工場労働における構造的抑圧への無意識的な抵抗の表れとして位置づけられる。

第7章では、本書の中心的テーマである中国の経済自由化政策が農村から都市・工業地域への労働移動を促し、それによって形成された農民労働者の主体性とその抵抗が改めて論じられる。本書は、社会体制によって抑圧される個人の生を描写することで、現代中国における支配的な言説と権力構造に挑戦し、個人の視点から社会変革の可能性を提示している。著者は、農民労働者が市場経済と国家権力のはざまで経験する「多重の傷」に焦点を当て、それに対する抵抗を理論化する必要性を主張する。特に、個人と集団という二項対立を超えた「多地点抵抗 (multisited resistance)」の概念が提示される。この抵抗は、単なる集団的な運動ではなく、個々の身体的・精神的経験を通じて表出されるものであり、労働現場の微視的な力学や家父長制の規範と交錯する。労働者主体の形成に関しても、経済的・政治的視点にとどまらず、文化的・心理的要因が不可欠であると強調されている。

## 2.2. 寮・寄宿舎研究としての本書

次に、本書の寮・寄宿舎を分析する産業労働研究としての特徴を指摘する。前項でみてきたように本書では、前世紀中国の自由主義政策の帰結として生み出された新たな労働主体「打工妹」の構成とその経験についての分析がマクロな社会構造変動に位置付けられながら行われる。筆者は精緻なエスノグラフィーによってグローバル生産の現場における労働実態や労務管理、そしてそこで働く労働者の経験をその再生産にまで踏み込んで生き生きと描き出している。

本書はまず、Foucault の権力と主体の概念を用いて、工場内に縦横に張り巡らされた権力の網目や、その影響を受ける主体に関わる言説を分析対象とする。具体的には、工場内で女性労働者に投げかけられる言説や、生産ライン上に構築された視線・監視マトリクスの検討などを通じて、工場の生産システムや工場と寮・寄宿舎という空間における「工場管理」という権力関係が、どのように主体へ働きかけているかを捉えようとしている。さらに、工場と寮・寄宿舎という空間に存在する非公式かつインフォーマルな管理や規制は、日常的ながらも非常に強力な影響力を持つ。この実態を明らかにすることは、生産と生活の空間における権力と労働者の主体の関係を考察する上で大きな意義があると言える。

また労働者の集団居住とそこで育まれるネットワークの関係を問題にし、資本の労務管理を一部相対化していることを明らかにしたことも本研究の重要な特色だろう。労働者は出身地にもとづき工場と寮の中でインフォーマルなネットワークを形成している。こうしたネットワークは就職とその後の労働、私生活においても密接なかかわりを持っている。こうしたインフォーマル集団はその地方ごとの方言により互いを差異化し、工場および寮内での価値闘争を行っている。こうした寮内集団は対立するだけでなく、時として深く結びつき、公式の労働組合に頼らない非公然的なサボタージュや生産管理者との交渉を引き出していた。Pun はこうした生活と生産が深く結びついた環境下でのインフォーマル集団について、労働者の連帯を助けるものとして肯定的な評価を与えている。重要なのはこうした労働者の連帯が、労働力を都合よく

工場に供給し管理するための寮施設によって育まれる側面が存在するという点であろう。労働者を抑圧し監視・管理するフォーマルな制度の分析に留まらず、そうした空間に生活する労働者の抵抗性への着目は本書の重要な特色であると言える。

そして何よりも本書は、労働者を収容し管理する寮施設を労使関係および生産構造との関係の中で位置付けることに成功している。こうした分析の成功は寮・寄宿舎の多面性の把握によるところが大きい。本書において **Pun** は寮・寄宿舎が、産業にとっては移民の労働募集のための生産設備であり、日常的な労働者管理と労働時間の柔軟な延長のための労務管理装置であり、それと同時に労働者にとっては集団的抵抗やネットワーク構築などの可能性を持つ生活の間でもあるということを明らかにしている。こうした分析は、生産現場やその構造といった工場内部のみの分析にとどまらず、労働者の直面する文化的規範、市場や行政などの規制などさまざまな工場街の分析の中で、寮・寄宿舎を分析したことによりもたらされている。本書は多面性という難しさを抱える寮・寄宿舎という対象が、生産構造と労使関係とのダイナミクスの中で総合的に捉えられている。

**Pun** らを中心とする一連の研究では、中国南部のグローバル生産構造において寮・寄宿舎が大きな役割を担う状況を **Dormitory Labour Regime** として理論化している（以降本稿では強調する場合を除いて **DLR** という略称で表記する）。中国南部における **DLR** は、西側諸国からの資本移転によるトランスナショナルな生産体制の形成やグローバル資本主義の拡大との結びつきのなかで顕在化したものであり、グローバル化がもたらした特殊な体制と見なせる。

しかし、寮・寄宿舎が生産や労使関係に深く組み込まれる現象は、グローバル生産やそれと結びついた資本主義、あるいは中国南部などの地域のみ限定されるのだろうか。次節からは近代以降生産や労使関係を円滑に進めるために、寮・寄宿舎が労働力の集積や企業内規律の維持と密接に結びついていた日本の産業労働に着目する。

### 3. 日本の産業労働研究における寮・寄宿舎の分析

日本の産業には、寮・寄宿舎を多様な形で広く活用してきた歴史がある。産業における寮・寄宿舎は労働者の募集や定着といった生産条件、そしてそうして収容した労働者の労務管理とともに、労働者にとっては生活の空間という側面がある。こうした三つの側面は産業における寮・寄宿舎が常に有している。ただそれらのうち特定の産業や社会的状況および時代の影響のもとで、これらの側面のうち特定の側面が大きな役割や機能を持つこともある。しかし基本的にこれらは寮・寄宿舎という存在についてまわる性質であり、互いに影響しつつ産業構造や労使関係と関係している。一つの側面のみに着目するのでは他の要素およびそこの関連を見逃してしまい、生産や労使関係への影響を十分に捉えることは難しくなる。

産業における寮・寄宿舎の持つこうした三つの側面を簡単に切り離して独立に扱うことは難しい。しかしそれでも日本産業に深く刻み込まれた寮・寄宿舎とその性質を理解しやすくするために、それぞれが日本の産業に強く影響を与えてきた場面ごとにまとめることとする。まず工場に通勤可能な地域に大量の労働者を留め置くという生産設備としての役割である。たとえ

ば明治・大正期の繊維業においては、農村からの出稼ぎ女工が工場付近の寄宿舍に集団で収容されていた。高度経済成長期にあたる1960年代にも、全国的に中卒者の3割から4割が毎年県外就職を行っており（労働省職業安定局雇用政策課編 1979）、大量の若年労働者が農村部から都市部へ就職を機に移動していた。そうした状況下で企業が提供する住宅施設は彼らにとって都市部定住の手段として大きな意義を持ったと考えられる。1964年1月時点で事業付属寄宿舍に寄宿する年少者は27万8,000人に達し、基準法適用事業場で就労する年少者全体の18%に相当していた（総理府青少年局編 1966: 122）。生産設備として労働基準法規制を受ける事業附属寄宿舍のみならず、福利厚生として解される独身寮の生産への影響もまた重要である。なぜなら独身寮もまた、遠隔地からの大規模な労働募集や住宅事情の悪い都市部における人材獲得などに利用されていた。このように産業における寮・寄宿舍といった住宅設備は都市部への労働力募集の前提条件という側面がある。

第二に、企業が労働者の生活を管理し方向づける労務管理装置としての側面である。たとえば明治大正期の繊維産業では女工争奪防止策としての監禁的措置や教育の付与、あるいは温情的福利厚生の給付による経営家族主義への包摂が行われていた。さらに明治末からの子飼いの労働力への転換では、養成工の全国的募集のためには住宅設備がその条件となりうる。また技術教育と組み合わせる形で寄宿舍が利用され、その過程で生活管理と技能訓練が結びついていたことも指摘されている（産業訓練白書編集委員会 1971）。そして戦時体制下では、労働者の定着や勤労意欲の向上、さらには統制的管理を図る手段として寮・寄宿舍が活用されていた（佐々木 2019）。

第三に、労働者の生活空間としての側面である。終戦直後の絶対的住宅難においては、企業の提供する住宅が労働者の唯一の定着策とされた（有泉編 1956）。またそこでの共同生活は労働運動の連帯や抵抗の基盤にもなり得た。近江絹糸事件においては寄宿舍における封建的管理や強制が問題化されるとともに、そこから生まれる連帯や抵抗が闘争の原動力になったことが示唆的である。このように日本の産業に寮・寄宿舍は様々な形で深く関与してきた。

しかし日本の産業と寮・寄宿舍の持つ多面性とのかわりかは、これまでの日本の産業労働研究で十分に扱われてこなかった。寮・寄宿舍が特定の産業において断片的に取り上げられる場合はあっても、産業全般や生産関係の観点から寮・寄宿舍を体系的に位置づける研究は十分に蓄積されていない。特に、その影響が顕著な特定の産業においてのみ注目される傾向が見られる。戦前においては繊維産業の研究において取り上げられ、戦後においては自動車産業に関する研究において注目されてきた。

明治大正の繊維産業についての研究では寮・寄宿舍について、主に二つの注目がある。一つは寮・寄宿舍の福利厚生としての側面に注目したもので、間宏（1964）などが、生活に対する恩情的給付が労働者を経営体制に取り込むとした。一方でそうした寄宿舍の労務管理機能を指摘した研究も存在する。隅谷三喜男（1974）は繊維業における寄宿舍の本質を拘置性にあると指摘した。また清川雪彦（1989）は製糸業における寄宿舍に着目し、それが他国にはない日本的な集団労働編成を生むとした。また下川進（2010）は寄宿舍における労働者への教育やその管理が労働者としての身体性の形成につながると指摘した。こうした研究は生産設備および労

務管理としての側面に光を当ててきたが、S. Schaal (2020) が指摘するように労働者の生活空間としての分析については課題を抱えている。

一方戦後の寮・寄宿舎については自動車産業における着目がある。自動車産業、特にトヨタ研究では労働過程理論などを吸収しつつも、「職業・生活研究会」や「地域構造研究会」といった共同研究を中心に労働者の生活構造に目を向けて地域との関係を扱ってきた。その中で労働時間以外の労働者の生活に、企業活動として人間関係省活動が及んでくることが指摘されてきた(野原・藤田編 1988; 小山編 1985)。しかし寮・寄宿舎における生活に対する企業管理という側面は、この企業内集団による人間関係諸活動の分析を除いて、問題化されてこなかった。寮や寄宿舎といった企業住宅が、単なる福利厚生を提供だけでなく、そのなかで労働者の生活に働きかけ、企業への忠誠心を高めるための装置として利用されることが企業内福祉論では、かねてより指摘された(能塚 1994 など)。また、鎌田慧(1973)や伊原亮司(2003)らの臨時工としての参与観察からは、寮・寄宿舎を通じた管理や監視の具体的実態も提出されていた。しかしそうした性質について、労使や生産関係との位置づけの上での具体的かつ詳細な分析は、これまで十分に行われてこなかったと言える。

日本の産業労働において寮・寄宿舎は長らく重要な役割を担ってきたものの、その多面的性質を踏まえて労使関係や生産との結びつきを論じる視点は十分に示されてこなかった。寮・寄宿舎のもつ多様な機能を捉えなければ、そもそも生産との関係を問うこと自体が難しい。現状、日本の産業労働研究において多面的に寮・寄宿舎を捉える視角は十分に確立されていない。したがって、寮・寄宿舎の多面的性質を把握しつつ、労使関係や生産構造とのかかわりを問い直すためには、こうした多面性を総合的に捉える視点や方法論の再検討が急務となっている。

本稿でレビューの対象となる Pun (2005) を中心とする南中国のグローバル産業研究は、産業内における寮・寄宿舎の多様な機能を捉えると同時に、それらが生産活動や労使関係にも深くかかわることを示している。そこで次節からは、こうした中国研究の多面的な把握から得られる示唆が、日本の産業研究においても概念や分析枠組みの面で新たなフィードバックをもたらすことを期待して、中国における寮・寄宿舎の分析内容およびそれが依拠する概念や視角を整理する。具体的には、中国におけるグローバル産業研究による寮・寄宿舎把握である **Dormitory Labour Regime** に着目する。この枠組みはグローバル資本主義と結びついた特殊な体制であるとされるが、その分析視点および依拠する概念は工場内部のみにとどまらず、労働者の生活や主体を捉えつつもそれらを総合的に捉えている。こうした研究の依拠する分析視角や概念をそのヒントにすることで、日本の産業における寮・寄宿舎の多面性を捉え直すことが可能となり、これまで周縁化されてきた寮・寄宿舎の労使あるいは産業との関係について新たな光を当てることができると思う。

## 4. Dormitory Labour Regime とその分析

### 4.1. Dormitory Labour Regime とは

Dormitory Labour Regime とは、工場併設または近隣の寄宿舎に労働者を集団で住ませ、

労働と生活の空間を一体化することで管理を強化する労働体制を指す。この体制の目的は、労働コストの削減と管理効率の向上にあり、特に外資系や輸出指向型工場において顕著に見られる。その特徴として、労働者が企業の管理下にある時間が延長されるだけでなく、寄宿舎という空間を通じて生活までも企業が統制することにより、労働力の搾取が二重に行われる仕組みとなっている。この体制は、農村から供給される豊富な移民労働者を絶えず取り込みながら、労働者の組織化や賃上げ要求の可能性を抑え込むという側面を持つ。DLR は国家の労働政策や企業の戦略と結びつき、中国経済の成長を支える強力な労働管理機構として機能してきた。

C. Smith (2003) は中国南部のグローバル産業の寮・寄宿舎について、過去の中国における寮制度および、日本の経営家族主義的紡績業における寄宿舎を対照物としながらその特徴をまとめている。それは基本的に以下の二点にまとめられる。

第一に寮・寄宿舎が労働者の再生産をカバーすることを目的としていないことである。一般的な福利厚生はその場所での生産だけでなくその労働者が自身を再生産していくために必要な供給を行う。しかし現代中国の寮・寄宿舎制度においてはそうした再生産のコストは労働者の出身地である農村や、あるいは労働者自身が工場退職後に都市で営む個人生活に対して投げ出されている。そこで生活する労働者は寮・寄宿舎の中で子供を設け、都市労働者として世代的な再生産を行うことは難しい。寮・寄宿舎は労働者の再生産をそこで行わせるのではなく、潤沢な農村人口を背景にそうした労働力を使いつぶし続けているのである。

第二に寮・寄宿舎における労働者管理は中長期的な勤続や、それにとまなう企業への帰属やコミットメントなどは要求していないという点である。パターナルな体制は中長期的な企業への勤続を前提にそれを奨励し企業共同体への包摂を行ってきた。しかしこの寮・寄宿舎はそうしたイデオロギー、あるいは人格に対する全面的包摂およびその返報としてのコミットメントを全く要求しない。寮・寄宿舎を用いる現代中国南部におけるグローバル生産の体制は、近代初期にみられた企業パターナリズムや日本における経営家族主義とも異なる、現代中国に特有の特殊な労務管理・労働供給体制であるという。

## 4.2. Labour Regime の発展と視角

本項からは Dormitory Labour Regime の概念について、その理論的基礎である Labour Regime 概念を踏まえながら概説する。Labour Regime は、労働過程論に端を発し、社会学、政治経済学、開発研究、フェミニスト政治経済学、労働地理学といった多様な分野の影響を受けることで、現在では学際的な概念へと発展している。Labour Regime 研究のレビュー的整理では Pun らによる 2000 年代半ばの中国南部の研究はグローバルな力学との関係を問う Phase3、その中でも先駆的な研究として位置付けられている (Baglioni ほか 2022)。

以降は Labour Regime の起源を労働過程論に絞って整理した J. Peck (2022) にもとづき、その展開を詳述する。労働過程論としての Labour Regime は M. Burawoy (1979, 1983, 1985) の Factory Regime がその淵源にある。Burawoy は、工場内での労働のみならず、その背後にある国家や社会の力学を含む生産政治論を提唱し、資本家と労働者の関係がどのように再生産されるのかを分析した。このアプローチは、国家の規制や福祉政策が労働者の再生産に与える

影響を視野に入れることで、単なる工場内の労働過程の枠にとどまらない理論へと発展した。Burawoy は **Factory Regime** という概念にもとづき、労使関係だけでなく、国家による労働力の社会的再生産への介入を考慮し、国家ごとの労働体制を分類した。しかし当初は **Factory Regime** は国家ごとの枠組みとして整理されていたが、次第に他の領域の関心を受けながらグローバル化する資本主義との関係で **Labour Regime** として分析されていくことになる。

この議論を受け継ぎながら、中国における **Labour Regime** を具体的に分析したのが Ching Kwan Lee (1995) である。Lee は同じ企業が運営する香港と深圳の工場に焦点を当て、場所や労働市場の状況、ジェンダー規範など複合的な要因がいかに関労働管理のかたちを変容させるかを実証的に示した。たとえば深圳では、農村部からの若年労働者が多く、懲罰的かつ集権的な統制が行われていたのに対し、香港では年配の女性労働者が中心で、家族的な関係性をベースとする緩やかな管理が機能していた。この違いは、同一企業であっても地域社会の制度や文化的背景、ジェンダーの在り方によって、**Labour Regime** が大きく変化することを示唆している。こうして Lee の研究は、工場内部だけを見つめる従来の議論に加え、ジェンダーや日常生活の文化的要素までも考慮すべきだと指摘し、資本主義的 **Labour Regime** をより多面的かつ包括的に捉える重要性を強調したのである。Burawoy を継承した Lee によって、**Labour Regime** 研究に労働者の再生産やジェンダー的観点、さらにはグローバルな経済構造との関連を同時に捉える枠組みが形成され、**Labour Regime** 分析はより総合的なものになった。

こうした議論の拡大に加えて、資本主義の空間的再編に関する視点を実証的に分析したのが Pun and Smith (2007) である。この研究は、D. Harvey が示した「空間的回避 (Spatial Fix)」や、A. Herod が提唱した「労働の空間的回避 (Labor's Spatial Fix)」を理論的枠組みとして取り入れ、中国のトランスナショナルな労働過程における空間の役割を詳細に論じている。Harvey の「空間的回避」概念は、資本の自己増殖のために空間がどのように構築・再構築されるかを理論化するものであり、資本主義の地理的發展を説明する重要な視点を提供する。しかし、この理論は主に資本の動態に焦点を当て、労働者の能動性を十分に考慮していないとの批判もある。これに対し、Herod の「労働の空間的回避」は、資本の空間的戦略に対抗する労働者側の戦略に着目し、労働組合や地域的な労働運動が資本の配置転換にどのように影響を与えるかを明らかにしようとするものである。

Pun and Smith (2007) は、Harvey の資本主導的な空間再編の視点をローカルな労働市場の文脈へ接続し、さらに Herod の労働者側の能動的戦略の可能性をも考慮しながら、グローバルな生産ネットワークと地域的な労働市場の相互作用を明らかにすることを試みている。特に、グローバル経済の変容に伴う資本主義的労働の再編を、単なる資本の移動による労働の流動化という視点ではなく、資本と労働者の戦略的關係として分析している点に特徴がある。結果として、本研究は、資本の空間戦略と労働者の空間的対応がいかに関絡み合い、地域ごとの労働体制がどのように形成・変容するのかを理論的に解明し、新たな分析枠組みを提供している。これは、従来の労働過程研究における工場内分析を超え、より広範な空間的・政治経済的文脈の中で労働を位置付ける試みとして、大きな意義を持つ。

本節で扱う DLR は、労働者統制のあり方を捉える **Labour Regime** 概念のこうした発展の

系譜上に位置する。当初このような労働者管理体制は中国南部のグローバル生産に特有の体制だとして登場した。しかしその後には寮・寄宿舎設備を用いて労働者の生活をも統制しようとする労働者管理体制について中国南部以外の地域でも分析が行われている。たとえばカナダにおける農業において分析を行った J. Perry (2018) やチェコにおける移民労働者を利用した電子製造業の分析を行った H. Schling (2022) などがその例である。また中国製造業における分析についてもその後積極的な展開が見られ、その分離やジェンダー化あるいは抵抗的側面に着目した研究などが積み重ねられている (Pun 2007; Chan and Pun 2009; Pun and Koo 2015 など)。DLR は中国におけるグローバル生産に特有の形式として提出されたが、その後世界各地で運用されている生産と労働者の生活を統合的に管理する経営体制の批判的分析のために鍛えられ、労働者の集団的共同性から生まれる抵抗的側面およびその環境と権力規制によってそれらを抑え込み管理しようとする経営側による搾取、そして両者の相互作用を分析する重要な分析視角となっている。

## 5. おわりに

本稿は日本の産業労働研究がその重要性にもかかわらず産業における寮・寄宿舎について十分な分析と評価を行ってこなかったことを指摘し、そうした問題点に対して Pun Ngai の *Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace* の寮・寄宿舎研究としての側面に着目しレビューを行うことで、分析視角上の示唆を引き出してきた。本書は寮・寄宿舎で生活する労働者の主観的側面と産業構造を関係づけながら分析を行っていた。こうした分析は後に *Dormitory Labour Regime* として結晶化される。本稿は企業の管理する施設でありながら労働者の生活空間でもあるという多面性を捉えるこうした研究に着目し、その分析視角およびその基礎となる *Labour Regime* を概観した。

近代産業における寮・寄宿舎利用については、日本が中国よりも古い歴史をもち、産業そのものと多面的な側面が深く結びついてきた。そのため日本の産業労働研究においては、グローバル産業を対象とする DLR 研究群を上回る多角的な把握と、生産との関係を含む分析がいつそう求められると言える。DLR はグローバル資本主義と密接に結びついており、その枠組みをそのまま日本の近代産業労働における寮・寄宿舎研究に適用することは難しい。しかし、これらの研究を通じて磨かれてきた *Labour Regime* の視角は、日本の産業労働研究が課題としてきた寮・寄宿舎の多面性を把握するうえで、重要な役割を果たすと考えられる。

## 〈注〉

- (1) SSSP は Society for the Study of Social Problems の略称

## 〈文献〉

- 有泉亨編, 1956, 『給与・公営住宅の研究』東京大学出版会.
- Baglioni, Elena, Liam Campling, Neil M. Coe, and Adrian Smith, 2022, “Introduction: Labour Regimes and Global Production,” in *Labour Regimes and Global Production*, eds. Elena Baglioni, Liam Campling, Neil M. Coe, and Adrian Smith, Newcastle upon Tyne: Agenda Publishing, 1–26.
- Burawoy, Michael, 1979, *Manufacturing Consent: Changes in the Labor Process under Monopoly Capitalism*, Chicago: University of Chicago Press.
- Burawoy, Michael, 1983, “Between the Labor Process and the State: The Changing Face of Factory Regimes under Advanced Capitalism,” *American Sociological Review*, 48 (5) : 587–605.
- Burawoy, Michael, 1985, *The Politics of Production*, London: Verso.
- Chan, Chris King-Chi, and Pun Ngai, 2009, “The Making of a New Working Class? A Study of Collective Actions of Migrant Workers in South China,” *The China Quarterly*, 198: 287–303.
- Fischler, Lisa, 2006, “Book Review: *Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace*,” *China Information*, 20 (2) : 343–45.
- 藤田至孝, 1997, 「企業内福祉と社会保障の一般的関係」藤田至孝・塩野谷祐一編『企業内福祉と社会保障』東京大学出版会.
- 間宏, 1964, 『日本労務管理史研究』ダイヤモンド社.
- 伊原亮司, 2003, 『トヨタの労働現場——ダイナミズムとコンテキスト』桜井書店.
- 鎌田慧, 1973, 『自動車絶望工場——ある季節工の日記』現代史出版会.
- 清川雪彦, 1989, 「製糸業における広義の熟練労働力育成と労務管理の意義」『経済研究』40 (4) : 299–312.
- 小山陽一編, 1985, 『巨大企業体制と労働者——トヨタの事例』御茶の水書房.
- Lee, Ching Kwan, 1995, “Engendering the Worlds of Labor: Women Workers, Labor Markets, and Production Politics in the South China Economic Miracle,” *American Sociological Review*, 60 (3) : 378–97.
- 野原光・藤田栄史編, 1988, 『自動車産業と労働者——労働者管理の構造と労働者像』法律文化社.
- 能塚正義, 1994, 「福利厚生 of 企業福祉への展開と労働者生活」『経済学論叢』45 (3) : 247–77.
- Peck, Jamie, 2022, “Modalities of Labour: Restructuring, Regulation, Regime,” in *Labour Regimes and Global Production*, eds. Elena Baglioni, Liam Campling, Neil M. Coe, and Adrian Smith, Newcastle upon Tyne: Agenda Publishing, 63–78.
- Perry, J. Adam, 2018, “Living at Work and Intra-worker Sociality Among Migrant Farm Workers in Canada,” *International Migration & Integration*, 19: 1021–36.

- Pun, Ngai, 2005, *Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace*, Durham and London: Duke University Press; Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Pun, Ngai, 2007, “Gendering the Dormitory Labor System: Production, Reproduction, and Migrant Labor in South China,” *Feminist Economics*, 13 (3–4) : 239–58.
- Pun, Ngai, and Anita Koo, 2015, “A ‘World-Class’ (Labor) Camp/us: Foxconn and China’s New Generation of Labor Migrants,” *positions: asia critique*, 23 (3) : 411–35.
- 労働省職業安定局雇用政策課, 1979, 『史料: 戦後の労働市場——職業安定業務統計の証言 第3巻』労働省職業安定局雇用政策課.
- 佐々木啓, 2019, 『「産業戦士」の時代——戦時期日本の労働力増員と支配秩序』大月書店.
- 産業訓練白書編集委員会, 1971, 『産業訓練百年史——日本の経済成長と産業訓練』日本産業訓練協会.
- サンドラ・シャール, 2020, 『「女工哀史」を再考する——失われた女性の声を求めて』京都大学学術出版会.
- Schling, Hannah, 2022, “‘Just-in-Time’ Migrant Workers in Czechia: Racialization and Dormitory Labour Regimes,” in Elena Baglioni, Liam Campling, Neil M. Coe, and Adrian Smith eds., *Labour Regimes and Global Production*, Newcastle upon Tyne: Agenda Publishing, 301–16.
- 下川進, 2010, 「明治・大正期の日本紡績企業による労働者の生活過程管理」『日本経営学会誌』25: 28–38.
- Smith, Chris, 2003, “Living at Work: Management Control and the Dormitory Labour System in China,” *Asia Pacific Journal of Management*, 20: 333–58.
- 総理府青少年局, 1966, 『1966年版青少年白書』.
- 隅谷三喜男, 1974, 『日本賃労働史論〔第二版〕』東京大学出版会.
- Thunø, Mette, 2005, “Book Review: Made in China: Women Factory Workers in a Global Workplace by Pun Ngai,” *The China Quarterly*, 184: 976–78.